

3月号の主な記事：プロトフの「メン・イン・モーション」

出演者の水準の高さが印象的だった、イヴァン・プロトフの企画公演。マイク・ディクソンがレポートします。

ロイヤル・バレエを退団した後のプロトフは、持ち前の独立不羈の精神もあって、ダイナミックかつ知的なプロデューサーとして頭角を現しつつある。そして先ごろセルゲイ・ポルーニンが同じくロイヤルを電撃退団すると、男性ダンサーという存在は一躍時の話題となり、BBCのイヴニング・ニュースや国紙の一面で取り上げられた。バレエにおける男性の威信をコンセプトとした本公演のチケットがまたたく間に完売したのも、不思議なことではない。

初演から1世紀を超えたばかりのフォーキン振付『ばらの精』が幕開きを飾ったのも、新鮮で時機をえたアイデアである。1911年の『ばらの精』初演はニジンスキー伝説の頂点をなすものであり、後の男性ダンサーの遠い目標となった。この日それに挑んだのは、マリンスキー劇場のイーゴリ・コルプ。長身のスタイリッシュなダンサーで難しい技術も巧みにこなし、最後に窓から消えてゆく瞬間までみごとな跳躍を見せた。腕も優雅で表現力豊かだったが、両性具有的なばらの芳しさを暗示する、絡みつくような柔らかさはなかった。そもそも、この役がコルプのような男らしいタイプに似合ったためしはほとんどないのだが、にもかかわらずこれは、満足できるパフォーマンスだった。初めての舞踏会から戻ってきたばかりの娘を踊ったのは、エレナ・グルジゼ。充分に演じながら演じすぎず、幸福な夢の中にあるように目を閉じて、非の打ちどころがない。男性の超絶技巧を見せる作品の中の、見返りの少ないおまけと受け止められがちなこの役も、このような名手を得れば、甘美な一編の詩になるのである。

『ナルシス』は、ソ連時代にカシヤン・ゴレイゾフスキーが振り付け、現在でもなおロシアの男性ダンサーにとって格別の重みを持つソロである。ウラジーミル・ワシーリエフによって広く知られるようになったが、振付自体は必ずしも満足のゆくものではない。湧き出る活力と内省の対比があるが、後者はダンサーが一息つくためのものと見られても仕方がない。だがセルゲイ・ポルーニンは、その静寂の部分で、もっとも多くを語ったのである。生気に輝く顔からはあらゆる種類の好奇心や夢があふれる。私がこれまで観たこの作品のうちで、もっとも説得力のある、魔法を観るような解釈だった。跳躍や回転も言葉を失うほど印象的であり、肌色のハーフ・タイツに包まれた完璧なプロポーションの身体は、舞台上の彼にはあらゆることが可能だと感じさせる。カーテンコールでの喝采は、割れんばかり。彼は単なるダンサーではなく、芸術家として迎えられたのである。

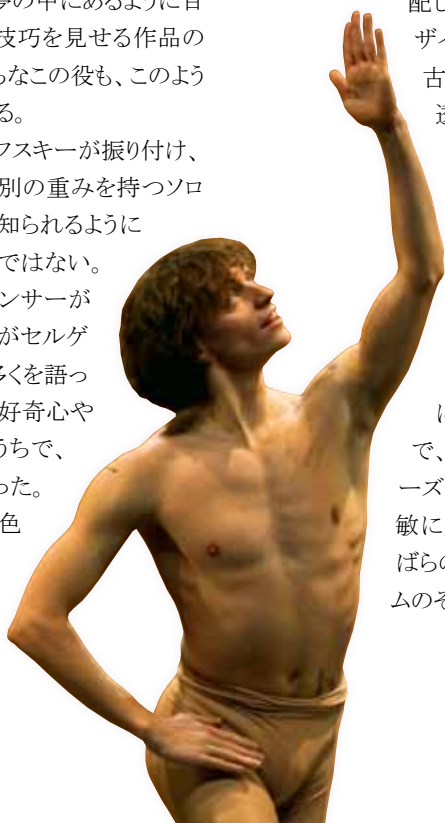


『イサカ』を踊るイヴァン・プロトフ Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

続くプロトフの『精霊の踊り』もまた、目に焼きつくようだった。フレデリック・アシントンがアンソニー・ダウエルに振り付けたこのソロは、趣味のよさとシンプルさが魅力だが、それがプロトフの優雅さや完璧な古典的技術をじつに雄弁に引き出していた。裸の上半身に白いタイツ、金の太いベルトと揃いの腕輪を着けたプロトフは、アシントンが創造した純粋な英国スタイルそのものであり、個々のステップを威厳たっぷりに表現した。俊敏なダニエル・プロイエットの踊る『アフターライト(パート1)』には、常に目を見張らされる。いかにもやすやすと、潤滑油の塗られた軸をもつかのように続く回転の魅力は、この小柄なダンサーならではの。本作はラッセル・マリファントの最も重要な振付作品のひとつであり、そこでのプロイエットは、男性の踊りにソフトなしなやかさという新たな側面を付与したのである。

最後にプロトフ、グルジゼ、アーロン・シリスが踊ったのは、人生の旅を描いた詩『イサカ』(カヴァフィ作)に基づく作品。音楽はデュカス作曲の『ラ・ペリ』からの、濃厚で官能的な曲で、九枚の黒いガラスを中央に、その両側にピンク、ターコイズ、黄色、青の斜めのパネルを

配した印象派風の装置は、ギャリー・ヒュームのデザイン。そのシンプルさは、プロトフ自身の端正で古典的な振付(安易に大技を詰め込まず、静寂と透明感が印象にのこる)とよく合っていた。プロトフの演じる主人公はまず野性的なシリスと、次いで永遠の女性を象徴するグルジゼと深く交わる。男性二人の踊りは子供の遊びのように無垢だが、同時に同性愛的な官能性をも感じさせる。プロトフとグルジゼのパ・ド・ドゥは美しいリフトで彩られ、パ・ド・トロワでは疎外されたシリスが哀しそうに、プロトフが伸ばした脚にすがる。最後の情景での三人の調和に至るまで、視覚的な雰囲気の変化はよく練られており、ポーズは次へと繋がる意味を含み、いずれも音楽に鋭敏に反応するものだった。いわばこの夜の舞台は『ばらの精』の窓で幕を開け、人生へと開かれたヒュームのそれで幕を閉じたのである。(訳:長野由紀)



『ナルシス』でのポルーニン Photo: E. Kauldhar/Dance Europe